

ドナウ通信

No. 48

目次

「千里の道も一歩から」 特命全権大使 松本 和郎	2
マジャール・スズキ社長拘留事件に対する 大使館の対応について 在ハンガリー日本国大使館公使 伊佐敷 眞一	4
お詫びと釈明 盛田 常夫	4
随想 ヴィソントラーターシュラ 馬場 勝久	6
補習校便り・ブダペスト日本人補習校行事から	8
20世紀を創ったハンガリー人列伝(その六) 「ウイグナー、P・ユージン」 マルクス・ジョルジュ	10
掲示板	17
日本人会より	19
忘れないでください、日本の選挙 「2001年夏 在外選挙」	20

「千里の道も一歩から」

特命全権大使

松本和郎

四月初めに着任してから早くも三ヶ月近く経ちましたが、着任早々、日本人補習校の入学式や日本人会主催行事、日系企業の一〇周年記念行事等に出席し、そしてスズキ自動車会長の訪問や日本ハンガリー経済合同会議、ブダペスト機械部品調達展示商談会の開催、また日本・ハンガリー友好議連副会長の衛藤征士郎前外務副大臣ご夫妻の訪問など、立て続けに行事がありました。こんなに多忙になるとは予想していなかったのですが、このことは逆に、日本・ハンガリー両国関係が順調に発展していることの証拠でもあり、体制転換から一一年目を迎えて、両国の協力が実を結び、成果の程が伺える段階に入っていることを意味するのだ

と思っています。

ハンガリーと日本との二国間関係の基礎は、何と云っても経済関係にあります。日本のハンガリーに対する直接投資累計額は、日本側統計で八億ドル（二〇〇〇年度末）、日本以外から資金調達した日系企業も多く、これも日本関係の投資として含めると、ハンガリー側試算では、九、一〇億ドルとなっています。これは、中・東欧諸国に対する直接投資総額の半分に当たります。二〇〇〇年度は、貿易額で一二億ドル（日本からの輸出：約四億ドル）、直接投資額は二・三億ドルです。この投資額は欧州全体で七位に位置しています。在留邦人数は八二五名ですが、このうちビジネス関係者が主体の長期滞在者数では七五二名で、これは欧州では九位となっています。ハンガリーはEU加盟候補国で、未だEUに加盟していませんが、これらの数字を見る

限り、二国間経済関係の緊密度は、EU加盟国のほぼ中程に位置することになり、ハンガリーは日本から見てもビジネス・パートナーとして重要な度の高い国といえます。これは体制転換後、早い段階でハンガリーに注目し、進出した日本企業の努力の集積の結果です。両国の架け橋として活躍されている日本企業の方々に敬意を表します。私も大使館としても、出来る限り両国間関係の発展のために尽力する所存です。

ハンガリーと日本との二国間関係は経済関係が主となっていますが、両国が真の意味でのパートナーとなるためには政治・文化レベルでの交流を更に深めていく必要があります。この分野は日本、ハンガリーの双方が意識的に努力すべき分野であり、短期的な効果を望むのは難しいかもしれませんが、幸いにも伝統的な友好関係に加えて、当国には約八五〇名の日本語学習者がいるなど、他の

ヨーロッパ諸国にはない恵まれた条件もあり、長期的な視野に立つて努力を重ねていくことが大切とされます。私の好きな諺に「千里の道も一歩から」という言葉があります。私はおそらく道半ばにして交替することになるかと思いますが、こういった意思を後に来る誰かが必ず継いでくれるものと確信しています。

私のハンガリーに対する第一印象は、ハンガリーの人達は自分達のアイデンティティや独自の文化を大切にしているということです。ハンガリー着任前は大阪分室担当大使として、日本文化発祥の地である関西で仕事をしてきたこともあり、急速に近代化や経済発展を遂げる中で少数の人たちが必死に日本の伝統文化を維持しようと努力されている姿を目の当たりにしてきました。一方、ハンガリーでは戦争で破壊されたドナウ川に架かる橋の再建に戦後取り組み、街並みも戦前と変わらず、歴

史的建造物が偉容を誇り、歴史と伝統に強い愛着を持っているように伺えます。こういったハンガリーの姿勢からとも学ぶことも少なくないのではないかと感じております。

最近の出来事では、六月一八日には、美智子皇后御著書「はじめてのやまのぼり」ハンガリー語版出版記念レセプションをマードル大統領夫人、ゲンツ前大統領ご夫妻、ロツケンバウエル国家文化遺産大臣のご臨席を得て、成功裡に終えることが出来ました。ゲンツ前大統領は昨年四月、国賓として訪日された際、皇后陛下から「はじめてのやまのぼり」の絵本がハンガリー語に翻訳されるとの話を伺われたとのこと、また、翻訳に当たってハンガリー語には存在しない「かもしか」も翻訳は容易でないと言った話を紹介されました。相前後しますが、六月上旬には所鳳弘先生による組み紐デモンストレーション、下旬には、草月流理事で一

級師範の福島光伽先生をお迎えして、生け花のデモンストレーション、ワークショップを開催し、ハンガリー側要人、各国大使夫人にもご出席いただき、日本の華やかな伝統文化を紹介することが出来ました。

着任して以来、恵まれた状況で第一歩を踏み出した感じがしておりませんが、当初は、当然のことながら「旅人の目」でしかハンガリーという国、ハンガリーの人達を見られませんでした。全てが新鮮でブダペストの街や自然の美しさに圧倒されましたが、三ヶ月近く経ち、段々当地に住む人間としての視点に変わりつつあります。ここにどれだけの任期で滞在するか分かりませんが、時間の経過とともに、当然私の見方も変わっていくと思います。いろんな交流と経験を通じて、ハンガリーと日本が「遠くにあるが、近い国」「遠くにあるが、近い友人」であることを自分の目で確認出来ることを願っています。

マジヤール・スズキ社長拘留事件に対する大使館の対応について

在ハンガリー日本国大使館
公使 伊佐敷 眞一

本誌春季号に掲載された「東西政治の風景」と題する一文において、盛田常夫氏は、昨年三月に発生し、本年三月に最終的に解決したマジヤール・スズキの篠原社長（当時）の拘留事件に対する大使館の対応について意見を述べられていますが、大使館が取った措置について、次の通り説明いたします。

本件のように邦人が当事者となった刑事事件については、大使館は、邦人が当局から正当な取り扱いを受け、基本的な人権が擁護されるよう、また、外国人であるために不利な取り扱いを受けることのないように、

支援することを任務としています。マジヤール・スズキ社長拘留事件においても、このような基本方針に則って最善を尽くしました。

具体的には、三月二十七日、本件が発生した後、県警察本部及びマジヤール・スズキから連絡があり、これを受けて、大使館として、翌日に行われた最初の尋問に立ち会いました。それ以降、糠沢大使（当時）以下担当官が、数度にわたって、県警から事情を聞くとともに、篠原社長に直接面会し、事情や要望を聞き、必要な措置を取りました。また、数回に及ぶ裁判所の尋問に立ち会いました。並行して、当国外務省関係部局に対し、篠原社長が当局から正当な取り扱いを受けるよう、正式に申し入れを行ないました。四月四日の釈放以降も、事件が最終的に決着するまで、マジヤール・スズキと緊密な連絡を維持し、必要な措置を取ってきました。

事件が最終的に決着するまで、事件の解決に悪影響を及ぼさないようにとの配慮からも、対外的に多くを語れなかった事情がありました点を、是非とも御理解を頂きたいと思いません。

お詫びと釈明

盛田 常夫

本誌春季号の私の一文「東西政治の風景」で、マジヤールスズキ社長が手錠連行され、しかもテレビニュースで放映されたことの公平さを欠くハンガリー警察の対応を批判し、大使館や商工会がこれに適切に抗議していないのではないかと指摘しました。これにたいし、大使館および糠沢前大使より、大使館がこの件であたかも不作為であったという叙述は事実を反し、読者に著しい誤解を

与えるものであるという旨の抗議を受けました。糠沢大使はマジヤールスズキ社長逮捕に際して、即座に拘留所に出向かれ早期の釈放に尽力された由。この事実を伝えず、不作為であつたかのような印象を与えたことで、糠沢前大使に不快感を与えることになりました。ここに記して、お詫びいたします。

文脈から明らかのように、私の一文は当国の司法過程への介入を主張したのではなく、時として生じるハンガリー行政当局による人権を侵害するような行為、著しく公平さを欠く行政、非文明的な対応などに対して、個人、団体、大使館が、適時的に批判と抗議の声を上げる必要性を主張したものです。

ハンガリーは、他の体制転換諸国に比べて、在留邦人への対応が特別に悪いとは言えません。しかし、警察、外国人監視警察署（この名称は旧体制から変わっていません）、税務

署、税関、入国管理などの公的機関における外国人にたいする対応や対処には、依然として旧体制時代のように権威主義的で非文明的で、時として乱暴なことがあります。とくに個人でこれらの機関に対応する場合その傾向が目立ちますが、個人がこれに対抗する手段はありません。また、アジア系民族にたいしては、欧米民族とは異なる対応を取る場合もあります。しかし、個人が行政当局に抗議をするという行動は旧体制時代を通して、旧社会主義国には存在しません。抗議をすれば有利になるどころか、さらに不利に処理されるからです。他方、在外公館などの政府機関や、欧米諸国の商工会などの抗議や要請にたいして、ハンガリー政府はそれなりの対応を行います。公的なものや、圧力団体には気を使うが、個人の不満や抗議は取り扱わないというのが、ハンガリーの行政当局に一般的に見られる傾向です。

他方で、個人的なコネや企業からの付け届けなどによる便宜の取り計らいは、日常茶飯に観察されます。コネが幅を利かせ、権威主義と同居するような状況のなかで、コネをもたない個人がまともに行政当局と対応する場合、その気苦労と負担は言葉に表せないものがあります。このような社会では、行政当局の対応にかかわる問題の解決に果たす大使館の役割は大きいと考えます。

また、日本人会や商工会なども、こうした問題に積極的に対応すべきだと考えます。欧米の同種の団体に比べて、ハンガリーの行政機関にたいする存在感が薄いことは否めません。ハンガリーの行政当局に公平を欠く不合理で非文明的な対応があった場合、声を上げて、改善を求めていくことは、ないがしろにできないことだと考えます。

随想

ヴィソントラーターシユラ

馬場 勝久

Sajnos nem tudom folytatni tobább magyarul... ハンガリー駐在で七年も居るとこの程度のハンガリー語はスラスラ出てくる、というのは冗談で言葉には大変苦労したし、結局モノにはならなかった。仕事の立場上、会合、セレモニー或いは地方の役所への公式訪問などで挨拶する機会が多かったが、いつも通訳をお願いせざるを得なかった。苦肉の策として、スピーチの冒頭に自己紹介やお礼などを棒暗記したハンガリー語で話しかけ、所詮長く続かないからその次に冒頭に紹介した「残念ながらこれ以上ハンガリー語では話せません

」を付け加える。そして通訳に切り替える。この方法は意外と好評であったし、またつたないカタコトのハンガリー語でも拍手喝采してくれるというやさしさがハンガリーの人にはあるので有り難かった。これはそのような機会がある方には是非お勧めしたい。

さて前置きはともかくとして今般ハンガリーを去るに際していろいろな思い出があるが、それらのキーワードとしては「カレー」と「テニス」と「エルジエーベット」となるでしょう。何れも直接にハンガリーに係なさそうだが...

実は我がサラリーマン生活三〇数年の中でこのハンガリー駐在で始めて単身赴任を味わった。「男子厨房に入らず...」タイプの人間としては一番困るのは食事で、当初は外食やインスタント食品で済ませた。それもだんだん味気無くなり、つまるところ「餓死するか」「自分で作るか」

の二者択一を迫られ死ぬわけにはいかないので一大決心をした。そういえば「初めてのおかず」というタイトルの本を家族は単身荷物に入れてくれていた。

かくして赴任一ヶ月してようやく米を炊き、三ヶ月してカレーを作った。お陰で今や料理については...

(?) 単身赴任といえ、メイドさんも若くてきれいな女性を期待していたがこれも裏切られた。しかし、時間はタップリあったので、スポーツや遊びはもとより美術館巡り、ハンガリーあちこち訪問など大いにエンジョイすることが出来たのは良いと言えよう。

テニスを初めとして自称アウトドア派としてはスポーツを大いに楽しめた。特にテニスは仲間にも恵まれ一年を通して毎週土日合計六・五時間プレーできた。ひところは週末八時間していたが、さすがに付き合う人もいなくなりその後は六・五時間と

なった。月一回の日本人ゴルフ大会も参加し、七年も居れば何か良いことがあるもので二回優勝させて戴いた。只シングルハンディー一步手前まで行ったのに結局果たせず、帰国前には一五まで戻ったのが残念である。ポーリングでは生涯最高の二一五をマークした。ハンガリーのポーリング場はストライクが出易い(?)ようである。

ハンガリーの思いでとしながらこれまでの話は別にハンガリーで無くともどこにでもあるような話で恐縮だが、三つ目のキーワードであるエルジェーベット(シシー)でようやく関係してくる。

ハンガリーに駐在してからシシーにことをいろいろ知るようになりすつかり気に入った。ゲデレー市にある彼女の館はもとより、ウィーンで特別展があれば飛んで行き、果ては彼女が行ったギリシャやポルトガルのマデイラ島まで追っかけた。彼女

を深く知ることにより、ハンガリーの歴史、文化、芸術などにも触れることが出来た。オペラなどは一生縁が無いものと思っていたが…。

一九九四年五月から二〇〇一年五月まで丸七年駐在した。この間ハンガリーが革命後の混乱というか生みの苦しみでどん底に喘いでいた時期から、ボクロシユプラン実施による耐乏生活を経験しOECDやNATO加盟を果たし今日の持続的経済成長軌道に乗るまでの、言わばハンガリーの国家的大実験を駐在員として肌で体験できたことは興味深かった。教科書ではなくまさに生きた経済学を学んだように思う。ハンガリーを去るに際して残念なことは二〇〇四年に実現するであろうEU加盟や二〇〇八年と予想されるEURO導入などの国家プロジェクトをこの国について見聞できないことである。きつと興味深い出来事となるう。

残念といえば、七年もいたのでこ

の際現役駐在員の最長不倒駐在期間達成を、とひそかに狙っていたが(?)、これも果たせずに帰国することになった。

最後になりましたが、仕事や私生活が充実できたのも周りの皆様があつてこそであり改めて感謝申し上げます。有難う御座いました。一番の思い出は駐在を通して素晴らしい仲間と知り合えたことだと思います。

Köszönöm Szépen &

Viszontlátásra!

補習校便り

ブダベスト日本人補習校行事から

春の全校遠足・マジヤールスズキ自動車工場見学・

五月一九日、小・中・高全員参加して、春の全校遠足を行った。

今回は、ヴィシエグラードの丘でボブスレーを楽しむとともに、学習の一環として、マジヤールスズキ自動車工場の見学をさせていただいた。自動車工場の仕組みについては、小学校第五学年社会科で詳しく学習する内容だが、学校で学習したことを実際に目で見、耳で聞くと、単なる知識でしかなかったことが、実際にまで高まったようだ。特に、工場内で子どもたちは、プレスの音の大きさに耳をふさぎ、激しく飛び散ってくる火花に驚いた。

見学後の質問コーナーでは、「仕事をしていて、どんな時が楽しいですか。」

「もうかっていますか。」

「どうして、ハンガリーに工場を作ったのですか。」

など、率直な質問が飛び交った。

今回、工場を案内してくださった子どもたちにとっては、自分のお父さん、また友達のお父さんである。それで一層興味深かったようだ。

このように身近な人を通して、ハンガリー社会に触れたことは、貴重な体験だったと思う。今後ともこのような体験活動が重ねられるよう、学校行事を企画していきたい。

最後に、今回の工場見学にご協力いただいたマジヤールスズキの近藤さん、塘さん、清水さん、村松さん、山崎さんに感謝したい。

（海外子女教育振興財団発行 月刊「海外子女教育」に投稿中）

薩摩琵琶奏者と現代舞踊家がやってきた

六月一日、ブダベスト日本人補習校に、現代舞踊家の新井英夫（あい ひでお）さんと薩摩琵琶の奏者、櫻井亜木子（さくらい あきこ）さんがやって来た。子どもたちと一緒に踊りたい、子どもたちに日本の伝統楽器を聞いてもらいたいという思いで、公演と公演の合間をぬっての大変ハードなスケジュールだったようだ。

当日は、小学部一年～四年までの子ども登校日だったため、子どもたち全員が参加できなかったことが残念である。

櫻井さんの薩摩琵琶演奏の様子

まず最初に、櫻井さんの薩摩琵琶の演奏を聴いた。薩摩琵琶という楽器の紹介と演奏曲である「平家物語」の説明をわかりやすく教えてくれた

ので、小さい子どもたちも食い入るように聞いていた。初めて見て、聴く琵琶の演奏と平家物語の語りにも私たちの目は、ぎらぎらと輝いていた。演奏後の質問コーナーでは、止まらぬ質問攻撃に櫻井さんもたじたじになっていた。

「どうして、あんな声がでるの？」

「どうして、あんな高い音や低い音がでるの？」

と質問された櫻井さんは、後で先生に教えてもらったくださいと答えられ、私たちも困っています。

次に、現代舞踊家の新井さんと一緒に「こんにやく体操」等、おもしろい身体の動きをして楽しんだ。子どもたちが、不思議な動きに合わせて、喜んで体を動かしている姿が印象的だった。

各界で活躍されている人たちを招いてのこのような活動は、子どもたちにとって貴重な体験になるとともに、平成一四年度から完全実施され

る「総合的な学習の時間」につながる活動である。今後とも、時間の許す範囲内で、体験活動を基盤にした様々な活動を実施したい。

（海外子女教育振興財団発行 月刊「海外子女教育」に投稿中）

二 世紀を創った

ハンガリー人列伝

(その六)

ウイグナー、P・ユージン

(ウイグナー・イエヌー)

一九〇二・一九九五年

マルクス・ジョルジュ著

愛しのハンガリー

「すべての子供と同じように、私もまた私の了解なしで、この世に生を受けた。私たちが出生のその日のことを思い出せないのは、本当に残念なことだ。もしその記憶を持っていれば、素晴らしいことなのに。でも、私は自分が生きていることを実

感するようになったその時から、世界に好奇心を持ち、幸せだった。少なくとも心の中では、生を授けてくれた両親に感謝していた。ウイグナーは、もっとも包括的な伝記を書き上げたアンドウリユー・サントンにこう語っている。

Wigner はドイツ語の Wiegner を短くしたハンガリー姓で、Eugen はハンガリーの名の Jenő に対応する。この名は大人の響きがあるので、子供のときには Jacques(ヤンチー、Johnny)と呼ばれていた。後にアメリカでウイグナーは個人的な手紙の署名に Wigwam を使っていた。

サントンはウイグナーがいかにハンガリーを愛んでいたかを描いている。彼がハンガリーについて質問したいと話し始めた途端、手をポンとたたいて「どうぞ (good)」と言い、「声量の豊かな、強いアクセントのある声で」こう話した。

「一九一〇年より前に学んだハン

ガリーの簡単な詩や歌は、今でも自然に出てくるんだ。もうアメリカに六〇年もいるが、今でも僕はアメリカ人よりはハンガリー人だ。アメリカ文化のほとんどは僕を素通りしている。ジョークは普遍的であることは間違いないが、それでもハンガリー人ほどそれを楽しめる国民はいないだろう。ハンガリーを離れて以来、そのようなジョークの趣味に出会うことがない。ドイツはもちろん駄目だし、アメリカも同じだ。食料品と薬は必需品だが、笑いはそうではないからね。どうして我々がジョークを作る技量があって、それを楽しめるのか分かるかい?」

ウイグナーはハンガリーの詩歌をこよなく愛した。「多分、ヨーロッパで一番繊細かもね」と。晩年になっても、好きな詩人ヴェリヨシユマルテイ (Mihály Vörösmarty) の長いテキストを暗誦していた。「ブダペストにはね、アメリカにはないよう

なカフェがたくさんあって、そんな所ではコーヒーを飲むだけじゃ長居させてもらえないの。科学とか芸術や文学の知的な会話なら良いんだよ」。別のインタビュウではこうも言っている。「アメリカに比べれば、比較にならないほど洒落た会話が聞かれたものだ。人はみなもつと文化のことを話しているからね」。

オーストリア・ハンガリー帝国が崩壊して、一九一九年に共産主義者が権力を握った。その指導者クン・ベーラは戦争捕虜としてロシアでイデオロギー教育を受けたユダヤ人だった。共産党の指導者の多くはやはりユダヤ人で、貴族の大土地所有者から封建的で民族的な特権を奪い取るうとした。共産党政権の崩壊の後、これが反ユダヤ主義の口実にされた。カルマン、ケストラー、ポラーニイ、スイラード、ヘヴェシらがハンガリーを出ることになったのはこれが直接の理由だった。また、当時は彼ら

とは反対側にいたノイマン、テラー、ウイグナーが後になってハンガリーを離れたのも、底流にある反ユダヤ主義によるものであった。

「クン・ベーラは無意識のうちに、核エネルギー開発でアメリカの優位性に負担することになった」とは、ブルンバークとオーウエンの弁である（もちろん、一九三七年にクン・ベーラがスターリンによって処刑されたのはこのことが原因ではない）。

ブダペストからベルリンへ

「第一次世界大戦下で状況が厳しくなるにつれ、ハンガリーでは共産主義者が勢力を伸ばしました。父は当初彼らに反対していましたが、共産主義の指導者の多くはユダヤ人で、次第に多くのユダヤ人が共産主義者と行動を共にするようになり、父もキリスト教に改宗しました。父にとって、ローマ・カトリックは共産主義と似通った良く組織された専制主義のように感じられ、また彼はルーテル教会高校を卒業していましたが、ルーテル派を選ぶのが自然でした」。

裕福な家庭はユージンをルーテル教会高校に送り、そこで生涯を貫く知的な土台を授けられることになった。ウイグナーはとくに特別に個人的にも教えてもらった数学教師ラーツ・ラーズロー（Rátz László）の影響が大きかったことを強調している。

ラーツはまた、同じ高校で学んでいたノイマンの面倒も見ていた。ユージンが一七歳になった時、将来の職業を決める必要があった。

「父が来て尋ねるには、大きくなったら、何になりたいか、って。暫く考えて、お父さん、本当のことを言えば、物理学者になりたいんだと答えた。父は答えを予期していたようで、すぐにこう尋ねた。良いかい、この国でいたい物理学者の職がいくつ保証されているか知っているかい。ちょっとだけ鯖を読んで、四つだと思う」と答えた。じゃ、その四つのうちのどれかを取れると思うかい。私が化学工学を選択したのは、こういう訳だった。高校でシヤーンドル・ニコラ (Sandor Mikola) に物理学を教わったが、ブダペスト工科大学でもベルリンでも、受けた講義は高校の復習のようなものだった。実際のところ、きちんと物理学のコースに出席したのは、ル

ーテル教会高校の物理学授業が最後だった」。

ユージンはブダペスト工科大学に入学したが、右翼政権がユダヤ人の大学生数を制限したので、ベルリン・ダーレンの工学研究所に行くことになった。そこでのアドバイザーはマイケル・ポラーニーだった。「ルーテル教会高校のラースロー・ラーツの後、私の尊敬する先生はマイケル・ポラーニーだった」と回顧する。「ポラーニーの優れた所は、非常に心こもった接し方で、若者を鼓舞することだった。生涯を通して、これほどまでに上手にやる気を与えてくれる人を他に知らない。彼は本当に誉めの芸術家だった」。ベルリンのウイグナーは、ノーベル賞のラウエ、ネルンスト、パウリと同じほどに、ポラーニーも優れた科学者だと考えていた。

「ある時、結合反応の不可能性についてポラーニーに意見を言ったこ

とがある。彼は良く理解しないまま、私のアイディアを聞いていた。数カ月後になって彼は僕にこう言った。

申し訳なかった。結合反応にかんすることだが、同じ問題がマックス・ボルンとジエームズ・フランクの直近の論文で議論されている。彼らに、君が同じアイディアを持つていることを話したよ。君の言ったことを理解していなくて、ご免ね、と」。

ウイグナーはマイケル・ポラーニーの指導の下で博士論文を完成した。彼の論文は分子の生成と崩壊を扱ったものだった。「二つの水素原子がぶつかると、一つの分子になろうとする。良く考えてみると、これは奇跡だと思われた。分子は不連続なエネルギー準位を有している。そうだとすれば、その二つの原子がちょうど同じエネルギー量をもつものと衝突しなければならぬとどうやって分かるのだろうか。また、それらの角運動量がプランク定数 h の整数倍

の最も近接した値に飛躍するのをどうやってコントロールしているのだろうか。私が提示した点は、励起している分子状態はしばらくして原子に崩壊してしまうので、分子のエネルギーレベルが明瞭には決定されないということだった。角運動量の保存すら、完全に厳密な法則ではないということだ。衝突において、角運動量の値はプランク定数 h の整数倍近くにジャンプするのだ。これらのことは量子力学が作られる前に、すでに書かれている。そのことから、私がハイゼンベルクの不確定性の関係を使っていると非難するが、それは当たっていない。私の結論は正しかった」。

対称性への関心

父アントニー・ウイグナーは工場の主任技師で、ユージンに化学工学を勉強してもらいたかった。そうす

れば、会社にとっても有用だと考えたのである。ユージンは一九二五、二六年にブダペストの皮革工場で働いていたが、当時の前衛的な近代物理学雑誌 *Zeitschrift für Physik* を購読していた。この雑誌から量子力学が作られたことを知ったのだ。ハイゼンベルク (Werner Heisenberg) の量子論を精緻化したマックス・ボルンとパスカル・ジョルダン (Pasquai Jordan) の論文を読んで、ユージンは有頂天になった。月給一三六マルクで、カイザー・ヴィルヘルム研究所の助手になる決断をするのに時間はかからなかった(この誘いはポーラニーが手を廻したものだ)。ユージン・ウイグナーが対称性に関心を向け出したのは、この時である。彼の回想を聞こう。

軸に並んでいるのかを研究してみないかと提案した。少し考えて、こう理解した。対称軸にあることによつて、ポテンシャルエネルギーの微係数が対称軸に垂直な二つの方向においてゼロになる(対称面の場合)、ポテンシャルエネルギーの微係数が一つの方向においてゼロになる)。こうして、私は量子力学における対称性の役割に興味を抱くようになった。クリスマスや夏休みはハンガリーで過ごした。ブダペストやドナウ河沿いのアルシヨーゴウドなどで。そこで、群論とその原子スペクトル、量子力学への応用 を仕上げた」。

量子力学へ群論 (Gruppentheorie) を侵入させることは歓迎されなかった。パウリ (Wolfgang Pauli) などはこのアイデアを集団ペスト (Gruppenpest) などと揶揄している。アインシュタインやシュレディンガー (Ervin Schrödinger) も、不快感を表していた。他方、ボルン

やラウエは肯定的だったし、ノイマンやスライドはウイグナーの方向を積極的に支持していた。

実験は条件が同じであれば、場所を変えても同じ結果が出る。今日の実験結果は昨日の結果と同じになる。装置全体を三〇度傾けても、結果には影響しないだろう。「実験結果は、場所や時間、あるいは装置の特別な方向性に依存しない。速度（たとえば、地球の速度）すら、自然法則が作用する仕方に影響しない」。この基本的な経験はもつと直接的に表現することができる。「世界は特別な中心を持たない。絶対静止、好ましい方向、特別な暦年など存在しないし、右と左でさえ対称的である」。

電子、光子、中性子の干渉は、分子の状態が一定の要素をもつベクトルで表現できることを教えている。観察者が別の観察者に代われば（別の実験場、異なる方向からの観察、違う時計の使用、左利きなど）、同じ

分子の状態は別のベクトルで表されるが、それは前のベクトルにある行列を掛けることによって得ることができる。この行列はある観察者から別の観察者へと変換させる。

ユークリッド空間や時間における対称変換は、その生成演算子が特別な命名を受けるほどに、自然のなかで重要な役割を果たしている。運動量、角運動量、質量中心の座標、エネルギー、パリティなどがそれである。実際、エネルギーは時間軸の変化を生み出し、現在を未来に変換する。このように、対称性原理は、力学（いかにして未来は現在から展開されるか）や構造（いかにして物体は運動量の交換によって相互に作用するか）、そして測定結果（いかにして人間が物体の状態を観測するか）に現れている。これらの自然の対称性から、運動量、質量中心の速度、角運動量、エネルギー、パリティの保存が生じるのである。

いま身体を×軸の回りに九〇度回転させ、それから<軸の回りに九〇度回転させたすると、最初に<軸で回転させ、次に×軸で回転させたものとは異なる結果になる。ここから、回転は交換可能でないことが分かる。つまり、回転の生成演算子である角運動量の要素が交換可能でない。このような単純な日常経験に見られる三次元空間と時間における変換の非交換性は、対応する行列を同時に対角化することができないことを教えており、したがって対応する量が同時に正確に測定できないことを意味している。このように、角運動量の不確定関係（さらに時間とエネルギーの不確定関係）は、ハイゼンベルクが不確定性原理を演繹するはるか前に、ウイグナーが博士論文を完成する過程で、一九二五年以前に認識されていた。

「空間反転による不変性（the extra power of left/right reflection

symmetry)」（パリテイ保存の法則となり、原子スペクトルにおける選択規則を導く）は、ウイグナーによって初めて認識された。

ウイグナーは、一九三〇年、これらの経験された時間と空間の対称性特性が、量子力学において最大限の力を発揮することを著書にまとめた。彼の著書は新しい科学の重要な古典の一つとして、ドイツ語、英語、日本語、ハンガリー語に翻訳された。筆者は、量子力学の永続可能なエッセンスがウイグナーによって説明されたと思う。重ね合せと対称性の基本的経験は、永続的な基礎として有効性をもつだろう。それはまた、二一世紀の学校で、二〇世紀のこの知的な成果を教育する方法にも影響していくだろう。

一九六三年、ウイグナーは、「とくに基本的な対称性原理の発見と応用によって、原子核および素粒子の理論に貢献した」ことで、ノーベル賞

を受賞した。

アメリカへ

ウイグナーは再び歴史の岐路に立っていた。ナチズムの台頭によって、ウイグナーはプリンストン大学の招聘を受けることにした。コルネリウス・ランツォシユ、フォン・ノイマン、エドワード・テラー、そしてユージン・ウイグナーは、新しい物理学を教えに、新世界へ渡った。革命的な科学アイディアの先進的理解とその特別な政治的直感の故に、彼らは「異星人」と呼ばれた。ノイマンやスライード、テラーは「異星人」の呼称を気に入っていたが、ウイグナーだけはそうでなかった。彼は自分を四人のなかで一番「のろま」だと考えていたからだ。しかし、彼だけが、輝くようなアイディアを、最後まで追及して纏め上げる仕事をした。だからこそ、ノーベル賞を受賞

したのは、ウイグナーだった。テラーとは幅広い関心と明晰な論理を分け合っていたし、スライードの獨創性に敬意を払っていたが、ウイグナーの謙譲さとは正反対の押しの強さには参っていた。また、ノイマンの卓越した頭脳には感嘆していた。

一九二〇年代の終わりから一九三〇年代は量子力学の英雄時代だった。分光学、化学、原子物理、分子物理、固体物理、原子核物理のすべての分野で収集された経験的な事実の解明に、量子力学は有効に適用された。ウイグナーとその弟子たち、たとえばジョン・バーディーン（後のノーベル賞受賞者）やフレデリック・ザイツ（後の国立科学アカデミー総裁）は、その指導的な役割を果たした。この時期に、ウイグナーは六〇本を超える基礎論文を単独で、あるいは共同で発表した。共同研究者として、マイケル・ポラーニイを初め、パスカル・ジヨルダン、ノイマン、ヴィ

クター・ヴァイスコップ (Victor Weiskopf)、ザイツ、バーディーン、ジョージ・ブライト (George Breit)、R・スモルコフスキ (Smoluchowski)、テラーなどをあげることができる。

ウイグナーは時々、家族と共にハンガリーで休暇を過ごし、ルドルフ・オルトヴァイが主催するブダペストの量子力学にかんするコロキウム (輪番セミナー) で講義した。オルトヴァイ教授は、同じセミナーに、相対性量子力学の創始者でノーベル賞受賞者のディラック (Paul Adrien Maurice Dirac) も招待している。ディラックは非社会的で、チャリティ的な社会活動には関心がないことで知られていた。だから、翌年に彼の方からブダペストへの再訪と講義の提案があったことは、オルトヴァイ教授にとって大きな驚きだった。ディラックの到着は、「偶然にも」ウイグナーの来訪と重なった。彼らは

ウイグナーの二人の妹たちと一緒に、バラトン湖へ遊びに出かけた。頻繁なブダペスト訪問から、ディラックがハンガリーに関心を持つ深い理由が明らかになった。彼はマルギット (マーガレット)・ウイグナーを妻に迎えたのだ。この婚姻によつて、ディラックとハンガリーの関係が深いものになり、一九七七年のディラック五〇歳の誕生日が、ブダペストで五〇本の蠟燭のケーキで祝われた。

核開発への運命

電荷を持たない新しい核粒子、中性子は一九三二年に発見された。ウイグナーが核物理の最初の論文を出したのは一九三二年で、ハンガリー・アカデミーの定期雑誌に「中性子の理論」を発表している。そこでは、量子力学が原子核の特性を理解する上で、どのように利用されるかを示している。湯川秀樹はノーベル賞記念講演を次の一節から始めてい

る。
「ウイグナーは、重水素からヘリウムへの結合エネルギーの急激な増加を説明するために、二つの核粒子間の核力は非常に近距離でなければならぬことを指摘している」。

ウイグナーは「陽子と中性子の合計数の保存」(反陽子と反中性子はマイナスで計算して) という事象に見られる新しい自然の対称性を明らかにした。陽子と反陽子は相互に相殺し合うが、我々の世界は「バリオン電荷の保存定理」によつて、数十億年も生存し続けている。

歴史は再び新たな転換を迎えようとしていた。そして、ウイグナーもまたそこで新しい役割を背負うことになった。一九三〇年代、ウイグナーは核反応 (中性子によつて発生される) を研究していた。その頃に、スイラードが一九三九年一月にウラン核分裂発見のニュースを持ってきた。彼らは中性子の連鎖反応を可能

にするこの発見の重要性を即座に理解し、そのための理論的な仕上げを急いだ。ウイグナーの近くにいたプリンストン大学教授のインシュタインを通して、ルーズベルト大統領への歴史的な手紙が送られた。マンハッタン計画でウイグナーは歴史に名前を残すことになった。彼はハン

ウイグナーは核武装に反対する防衛計画を提案して、人類の未来を考へることになった。

フォードの巨大原子炉を設計し、その原子炉で長崎の原爆に供給されたプルトニウムが製造されたのである。

ナチス・ドイツが崩壊した時、中欧で育まれた歴史的直感から、ウイグナーは日本にたいする原爆使用を阻止しようとするスライードの活動に加わった。第二次世界大戦後、オークリッジ国立研究所の所長になり、新しい原子炉の設計を主導した。彼は三七の патент を取得した。しかし、広島と長崎の犠牲は、生涯を通して彼の良心を悩ませた。果たして、都市に原爆を落とすことが必要だったのだろうか。これがきっかけで、

掲示板

フラット売ります

ブダペスト二区、五階（エレベーター付き）、一一平米、四部屋、一六平米テラス、築三年、静かで、日当たり最良好、交通の便良し、近くにプール、温泉、ショッピングセンターあり。まずは、ご連絡を下さい。

午後六時以降

TEL: 3260148（日本語、英語、ハンガリー語）

在ハンガリー日本人会御中

はじめまして、こんにちは。

私は、日本の山梨県にあります、山梨学院大学で働いている佐藤と申します。三年前に本学で「酒折連歌賞」を創設しました。「連歌」というのは、俳句や短歌に似たもので、問いの歌に対して、答えの歌を読む（作る）言葉遊びです。その連歌がここ山梨学院大学のある山梨県甲府市酒折で発祥したことから、この「酒折連歌賞」をつくることになりました。昨年、おとしは日本全国また、海外からもたくさん応募がありました。海外で生活されている皆様からも日本の文化に親しむ機会として、是非ご応募いただければと思います。なお、ホームページからも連歌の応募をうけています。こちらがホームページのアドレスとなります。

<http://www.sakaori.renga.gr.jp/>

ご希望でしたら資料もお送りいたしますので連絡をお待ちしております。よろしく願い申し上げます。

【問い合わせ先】酒折連歌賞事務局
担当：佐藤 万保美（さとつまほみ）〒400-0851 日本国山梨県甲府市酒折2 4 5 山梨学院大学
TEL：81-552-224-1641
FAX：81-552-224-1643
MAIL: msato@tos.ygu.ac.jp

編集室より

次号の締め切りは、九月中旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 356-5721
e-mail: y-sakai@mail.matav.hu
電話・FAXが変わりましたので、ご注意ください。

日本人会より

七月に入り夏本番！日差しの強い毎日ですが皆様いかがお過ごしですか？ 本年度も多くの方のご参加を頂き、無事上半期の行事を終える事ができました。

ゲーム大会：恒例の麻雀やダーツに加え新種目登場。デュエルモンスターに子供達は真剣勝負！でも大人にはルールが難しく？？ジャンケンやビンゴーになりホツとしたのでした！大使館や商工会各社の協力により多数の賞品をご寄付頂き、参加者一四〇名による賑やかな日曜の午後となりました。

第一回ソフトボール&バレー大会：好天に恵まれ新種目“ソフトバレーボール”も手伝ってか、参加者数過去最高一九〇名ほど（事務局発表）。新種目は始め参加者を募るのに少々

苦労しましたが決勝戦は！すごかった！普段は物静かな良妻賢母のお母さんが大活躍。拍手喝采！ただ、残念な事に素晴らしい併設体育館なのですが、中に入らないと見学できない（当たり前！）。外のグラウンドではお父さん達がいつもの如く真剣勝負の真つ最中。老若×女の大活躍を応援しやすくする方法はないかと、今後の課題となりました。

遠足：生憎のお天気でしたが雨の合間を縫って予定の行事が行なわれました。（もしかしたら雨が我々の合間を縫って降ってくれたのかも？）今年は天候の都合でさくらんぼの実りが今一つだった様ですが、見渡す限りさくらんぼ……ヴィシエグラードでは迫力万点の格闘技ショーや美味しいハンガリー料理に舌鼓。。ほぼ満席となったバス2台がブダペストに着くと　なんと晴れてきたではありませんか！来年はみんなでテ

ルテル坊主を作りましょう！

巡回健康相談：日本人医師団による健康相談は、二日で一〇名の方が受診。定期検診など受ける機会の少ない外地での生活、来年も予定されていますので多くの方のご参加をお待ちしています。

なお、末尾となりましたが大使館、補習校、お世話役・幹事会社の皆様には大変お世話様になりありがとうございます。この場をお借りし心より御礼申し上げます。

今後の日本人会行事は九月七日運動会を始め、第二回ソフトB&V大会、総会があります。追って都度ご案内しますので皆様のご参加をお待ちしています。

*誠に勝手ながら七月二二日～八月二〇日まで日本人会事務所はお休みとさせていただきます。

忘れないでください、

日本の選挙

二〇〇一年 夏 在外選挙

参議院選挙が間近に迫りました。そこで、第二回目となる在外選挙に關し、『在外交換選挙』と『非拘束名簿式比例代表制』についてお知らせします。

在外公館選挙

「衆議院比例代表選出議院の選挙」と「参議院比例代表選出議員」に限り、在外選挙人名簿に登録されている有権者の皆さんは、投票記載場所を設置している在外公館（ハンガリーにおいてはハンガリー日本国大使館）で、「在外選挙人証」及び「旅券」または「旅券に代わり身分を証明できる書類」を提示して投票することが出来ます。今回は「参議院比例代表選出議員の選挙」になります。

投票できる期間と時間は、原則として選挙の公示の日から投票記載場所（ハンガリー日本国大使館）ごとに

決められた日までの、午前九時三〇分から午後五時までです。

なお、今回の選挙（第一九回参議院議院通常選挙 参議院議員比例代表選出議員の選挙）においては、次のとおり実施される予定です。

選挙の公示日：

平成一三年七月一二日（木）

選挙の期日：

平成一三年七月二九日（日）

従って、ハンガリー日本国大使館での投票期日と時間は、投票期日が平成一三年七月一二日（木）から同年七月二二日（日）までの一日間、投票時間は午前九時三〇分から午後五時までが予定されています。

非拘束名簿式比例代表制

公職選挙法の一部が改正され、平成一三年（二〇〇一年）の「参議院通常選挙 参議院議員比例代表選出議員」から『非拘束名簿式比例代表制』が導入されることになりました。その最大

の改正点は次のとおりです。

これまでの参議院比例代表選挙は、あらかじめ政党の側で候補者の当選順位を決めておく方式（拘束名簿式）で、有権者は政党名を記載して投票しました。

これに対し、新たに導入された非拘束名簿式は、名簿では当選順位は決められておらず、有権者が候補者名または政党名のいずれかを記載して投票する方式なので、有権者は当選させた候補者を選ぶことができます。なお、届出政党名及び候補者名簿については、通信事情や事務手続きなどの事情で投票期の初日から閲覧が出来ない可能性があります。